

# 台湾の大学との国際交流活動の現状と問題点

—文藻外語學院, 南臺科技大學, 銘傳大學を中心に—

園田博文<sup>1)</sup> 百留康晴<sup>2)</sup> 百留恵美子<sup>3)</sup>

台湾南部の文藻外語學院における日本語教育と南臺科技大學のサマーキャンプを事例として、台湾の大学における国際交流プログラムの現状や異文化である故に生じた問題を取り上げた。

まず、文藻外語學院が実施した3週間あまりの短期留学の分析では、アンケート調査の結果から、参加した学生の多くが日本語能力の向上を実感し、日本人との交流を深めることによって多くの貴重な体験をしたことが窺えた。

次に、アンケート調査と面接調査を行い記述分析の手法を用いた2007年度の南臺科技大學応用日語系サマーキャンプの事例研究からは、日本語教育を日本人学生が行い台湾人学生と交流をするという試みを行った結果、日台双方に積極的な交流が生まれたことが明らかになった。主に日本人の側からカルチャーショックに関連した記述が多く見られ、日本人学生の異文化体験として見た場合、何も気づきがないよりも有意義な体験ができたと考えられる。

本稿によって得られた知見を活用し、山形大学で2007年度後期から始まる「アジア文化研修セミナー」(初回は台湾北部の大学間協定校である銘傳大學での研修)を充実したものとしたい。

キーワード：日本語教育 国際交流 台湾での授業アンケート サマーキャンプ 亞洲文化研習團

## 1 緒言

台湾教育部(日本でいう文部科学省 <http://www.edu.tw/>)では、教育部96年度(民國96年度は2007年度)施政方針(96年1月至12月)において、高等教育機関(大專院校)に

追求世界級的研究與教學, 發展國際一流大學及頂尖研究中心, 延攬教學研究優異人才; 發展區塊內重點大學, 提升大學自主性與競爭力; 推動大學教學卓越, 強化人才培育成效, 並建立大學評鑑機制, 提升高等教育品質。

との方針を掲げ、

積極參與國際教育活動, 拓展國際學術交流; 鼓勵各校擴大招收外國學生, 促進教育國際化; 吸引優秀外國學生來台留學; 鼓勵國外留學, 並建立留、遊學輔導機制。

と国際交流への取り組みを明示している。これは、教育部97年度(2008年度)施政方針においても同様で、

發展國際一流大學及頂尖研究中心, 延攬教學

研究優異人才; 推動大學教學卓越, 強化學生核心就業能力, 逐步建立大學評鑑及進退場機制, 提升高等教育品質。

積極參與國際教育活動, 拓展國際學術交流; 鼓勵學校擴大招收外國學生, 推動教育產業輸出, 促進教育國際化; 鼓勵國外留學及大學校院在校生出國研修、專業實習, 建立留、遊學輔導機制。

と、国際的にも最先端で良質な研究水準の獲得と国際的教育活動の推進を強く進めている。その背景には、近年注目されている多くの新大学の誕生にともなう大学教育の質に対する警鐘を鳴らす目的がある。ここ数年、これまで専科學校(Jr. college)や學院(college)だったものが大學(university)に次々に格上げされている。1998年度には専科學校(Jr. college): 學院(college): 大學(university)の割合は53校: 45校: 39校であったが、2006年度には、それぞれ16校: 50校: 97校となり、大學(university)になったものの数だけ見ても8年で約2.5倍にあたる。これは現在においてもなお増え続けている(注1)。台湾においても少子化は深刻な社会問題であり、大学入学者数は減少している。にもかかわらず、このような状況が生まれ、全国共通の大学入学試験(大學學科能力測試)な

1) 山形大学地域教育文化学部文化創造学科

2) 文藻外語學院日本語文系(台湾)

3) 南臺科技大學人文社會學院應用日語系(台湾)

どではほぼ全員が合格できるようになった。そのため、今度は各大学の教育の質に注意が向けられるようになってきている。このような中で、国際交流を具体的に進めるにあたり、ほとんどの場合は交換留学生と交換教員の派遣が行われている。施政方針に「專業實習」(専門を使った実習)と銘打ってあるように、留学や交換教員以外の方法で海外の大学との交流に取り組む方法を各大学が知恵を絞り、創意工夫しているのが現在の状況である。

山形大学でも地域教育文化学部文化創造学科異文化交流コースにおいて「アジア文化研修セミナー」という授業で、大学間協定校である銘傳大學に下記のごとき計画で赴くことになっている。

活動名称：日本山形大學亞洲文化研習團  
 提案單位：華語訓練中心・應用日語系（銘傳大學）  
 研習期間：2007年12月20日至12月27日  
 （共計8天）  
 研習地點：台北校區  
 住宿地點：基河校區接待所  
 研習人數：學生13人・領隊教員1人

一、華語文課程：

安排專業師資利用由淺入深的課程規劃及教學模式，主要以初階中文為主，著重在實用的字彙認識，口語練習及生活平常用語。課程以密集授課為主，培養學生實用基本華語會話能力，並透過生活實例練習時增強其語文能力。

二、文化及國粹課程：

透過專業師資教授示範課程，以及學員親自動手嘗試，從輕鬆有趣的學習中體驗中國傳統藝術及文化之美。課程主題包含捏麵人製作。

三、戶外教學參訪：

包括國立故宮博物院、傳統藝術中心（宜蘭縣）、羅東公園、龍山寺及板橋林家花園，讓國際青年親身感受台灣多元的文化與風俗民情。

異文化交流コースでは、下記の通り準備を進めた。  
 2006年12月11日（月）～15日（金） 事前調査，銘傳大學担当者とプログラム打合せ（於台湾）  
 2007年1月25日（木）第1回オリエンテーション  
 2007年4月6日（金）第2回オリエンテーション  
 2007年5月10日（木）第3回オリエンテーション  
 2007年6月28日（木）銘傳大學担当者とプログラム打合せ（於日本）  
 2007年9月13日（木）銘傳大學担当者とプログラム打合せ（於日本）  
 2007年10月10日（水）第4回オリエンテーション

2007年11月16日（金）第1回事前指導  
 2007年11月30日（金）第2回事前指導  
 2007年12月20日（木）～27日（木）実施（予定）  
 2008年1月22日（火）実施報告会兼次年度第1回オリエンテーション（予定）

詳細については、紙数の都合もあり、稿を改めて述べる予定である。

本稿では、文藻外語學院が実施した短期留学のほか、単に交換留学にとどまらない取り組みとして、アンケート調査を基にした文藻外語學院における日本語教育の授業分析、および、アンケート調査と面接調査を行い記述分析（注2）の手法を用いた南臺科技大學の応用日語系サマーキャンプの事例研究を通して、台湾での国際交流活動の現状と問題点を明らかにし、銘傳大學で行われる「亞洲文化研習團」のよりよい活動を模索したい。

## 2 文藻外語學院における日本語教育

### (1)本章で目指すもの

文藻外語學院は台湾高雄市に位置し、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、日本語、中国語など語学系の学科を中心として構成されている単科大学である。現地での日本語教育では日本で行うのとは異なり、学習者が習得した日本語能力を試したり、発揮したりする場が圧倒的に少ないのが悩みである。実際に日本へ行くことができ、日本文化に触れる機会、日本人と話す機会などがあれば日本語を学習する上での動機や意欲が増し、同時に日本語の運用能力も向上すると考えるが、現地ではそのような機会は少ない。その意味では日本人教師とのやりとりも学生たちにとっては日本語能力を発揮する貴重な場となっている。

そこで、教室活動、教室外活動における日本人教師たちとの接触を通し、いかに学生たちの日本語能力を発揮する機会を増やすことができるか、また、それ以外の場でどのようにして学生たちの日本語能力を発揮する場を広げられるか、ということが課題となる。

本章では姉妹校協定締結校との留学制度を活用した国際交流活動、会話授業での取り組みを報告し、学生に与えた効果の様子を考察する。まず文藻外語學院の沿革、教育課程、特色について述べる。次に大学間協定締結に基づく夏期、冬期の長期休みを利用した短期留学制度を活用し、得られた成果を紹介する。最後に2006年度筆者が担当した会話授業の実践報告を行う。日本人教師との教室活動が台湾人学生にどのように評価されているのかをアンケート結果を基に分析し、そ

の成果と課題を明らかにする。

## (2)文藻外語學院について

文藻外語學院は1966年ウルスラ会により、中学校を終えた女子学生のための5年制の高等教育機関として高雄市に開校された。これは日本の高等専門学校に当たる教育機関である。高雄市は台湾南部に位置し、台湾では台北市に次ぐ150万人余りの人口を有する国際港湾都市である。気候は北部とは異なり熱帯性気候に属する。文藻外語學院は当初英語学科、ドイツ語学科、フランス語学科、スペイン語学科から成り、語学能力を以て社会に資する人材を育成することを目的として創立された。1980年男女共学となり「文藻外國語文専科學校」と改称した。1990年に日本語学科が開設され、1999年には「文藻外語學院」と改称し、4年制、2年制の教育課程を併設した単科大学である技術學院となった。

台湾では高等教育機関にも実践的実業教育を旨とするものが存在し、文藻外語學院はそのカテゴリーに属す技術學院という教育機関である。また、単科大学と総合大学とは名称の上で区別されており、単科大学は「學院」、総合大学は「大學」と称する。中華民国教育部の定める一定の基準を満たせば、専科學校が技術學院、技術學院が科技大學、管理學院が大學と改称することが可能である。

現在、文藻外語學院は五専部、四技學院部、二技學院部という三つの異なる課程を有している。五専部は日本の高等専門学校に当たる5年制の課程、四技學院部は大学に当たる4年制の課程、二技學院部は五専部卒業生を対象とした2年制の課程である。二技學院部を卒業すると大学を卒業した者と同じ年数、学んだということになる。

学科は英國語文系・法國語文系・德國語文系・西班牙語文系・日本語文系・應用華語文系・外語教學系・國際事務系・國際企業系・資訊管理與傳播系・傳播藝術系・翻譯系・國際貿易系企業管理系がある。学科は語学系の学科を中心として構成され、語学教育に重点が置かれているのが特色であるが、近年、外国語教育、翻訳、國際的な企業管理、実務、情報管理、マスメディアなどの分野について専門的に学ぶことができる学科が相次いで新設され、語学を核としつつも國際化時代において有意な、幅広い能力の養成を実現できる体制を整えている。学生数は全日制課程大学部2901人、全日制課程五専部3012人、夜間部2236人である。またキリスト教主義に基づく人格教育も特色の一つである。

## 日本語学科における姉妹校協定締結校一覧

大学名	協定締結日
鹿児島純心女子大学	2001/5/29
志學館大学	2002/10/21
明星大学	2004/8/25
清泉女子大学	2004/8/29
神田外語大学	2005/5/25
オイスカ開発教育専門学校	2006/3/24
高知女子大学	2007/1

## 近年参加した短期留学プログラム

	日時	地点	人数
清泉女子大	2005/7/3~7/31	品川区	29名
オイスカ	2006/7/13~8/9	浜松市	14名
清泉女子大	2007/1/21~2/10	品川区	10名

## (3)短期留学を通じた国際交流

文藻外語學院は2007年現在アジア・ヨーロッパ・アメリカ・オセアニアの57の大学と姉妹校協定を結んでおり、協定に基づく交換留学も盛んに行われている。日本語学科においても日本の六つの大学と姉妹校協定を結んでいる。そのうち鹿児島純心女子大学・志學館大学・神田外語大学・高知女子大学とは相互の学生の交換留学を実施、清泉女子大学とは清泉女子大学の設けた夏期・冬期の短期留学プログラムを活用し、学生に日本語学習、日本文化理解の場を提供している。その他2006年にオイスカ開発教育専門学校とも協定を結び、清泉女子大学同様夏期の短期留学プログラムを活用している。次に協定に基づき実施された短期留学を中心に学生の日本体験がいかなるものであったのかということを紹介していきたい。

文藻外語學院の学生が受けた短期留学プログラムは概ね、受け入れ先の学校が用意した宿舎に寝泊りし、3週間程度の期間で文法、会話、読解、聴解、日本語教授法、日本文化などの授業を集中的に受けるというものである。また、授業は午前中のみで午後は日本人との交流や体験学習、自主研修などとなっており、日本への理解を深めることができる。

清泉女子大学ではこれまで計2回短期留学プログラムが行われた。1回目の研修では四技、二技、五専部の多くの学生が参加した。しかし、日本語能力を高める授業のみならず、日本文化体験などの活動も大学構

内で行われたため、文藻外語學院の学生たちは宿舎と大学を電車で往復する以外は生の日本社会に触れる機会が少ないものとなった。そこで、2回目の研修では文藻外語學院側と清泉女子大学側とで協議し、日本文化の授業は台湾ですでに習得済みということで午後は自由行動および自由見学とした。またホームステイも2月5・6・7日の3日間実施された。

2回目のプログラム終了後、実施されたアンケートからは日本人の教師や学生たちとの交流を深めた様子が窺え、授業内容や教師に対する評価、お薦め度などは概ね高い評価を得ていた。授業に関しては「会話と聞き取りが進歩した」「みんなの前で日本語を話すとき緊張しない」などの感想が寄せられ、交流については「友達ができ、一緒にお台場と六本木へ行った」「清泉女子大の皆さんは親切だいろいろな文化を習いました」「先生に宿題を直してもらった。一緒にテレビを見たり話したりした」「先生と最後の日にしゃぶしゃぶを食べに行った」などのコメントが寄せられた。ホームステイも非常に好評で日本で一番印象に残ったことに挙げる学生もいた。「みんなが親切でよかった」「家族が親切だった」「家族のみんなは本当にいい人です。毎日笑って楽しかった」などの感想が寄せられた。この短期留学では日本語能力の向上とともに様々な交流や体験を通して、日本の生活を実感し、理解を深めることができたようである。ただ、日本ではタバコを吸う人が多いことや電車が混んでいるという点に対して低い評価をしている者が見られた。

オイスカ開発教育専門学校での短期留学プログラムでは浜松城公園や浜名湖の見学、茶道、華道の体験、地元の小学生との交流、地元の祭りへの参加など、授業以外にさまざまな体験ができたようである。終了後回収したアンケートから留学試験問題を使った聞き取りの授業に関して「難しかった」「ちょっとスピードが速い」「たくさん新しい言葉を覚えられる」、ディスカッションの授業に関して「新しいことを知ることができた」「日本語ではっきり自分の意見を言うのは難しい」「話す能力がうまくなると思う」、俳句の授業に関して「面白かった」「俳句は日本文化の一つ」「俳句はあまり難しくなかった」、「先生のだじゃれは面白い」などさまざまな感想が寄せられた。

交流に関しては日本人だけではなく他の国からの留学生との交流も深められたようである。日本人との交流に関しては「休みの日いつも一緒に遊びに行った」「先生たちと他の研修生たちは親切だった。毎日一緒にしゃべったりして遊んだりしてうれしかった」「台湾

のことを教えた。日本人から日本のことを教えてもらった」「いっしょに学校でバーベキューをした」、他の国からの留学生との交流に関しては「いつもバレーをした」「ゲームをしたりダンスをしたりした」「英語と日本語を混ぜて手振りも加えて話していた」「歌を歌って言語交換をした」「授業のときディスカッションをして、自分の意見を話した」「挨拶して自分の国のことを教えた」などの報告があった。

オイスカでは授業やさまざまな場所の見学、さまざまな人との交流を通して日本語能力の向上と共に日本文化への理解も深めたようである。特に他の国からの留学生との交流は異文化を理解したり、日本語を学習する意味を実感したりする上で大きな刺激となったと思われる。

#### (4)授業実践報告

文藻外語學院日本語文系では四技學院部3年に「日本語口語訓練」という科目を開講している。この科目は必修科目で会話能力の向上を目的とする科目である。

1, 2年次に開講された「日本語會話(一)」「日本語會話(二)」を履修済みの学生が受講する。また、1, 2年次における「日文(一)」「日文(二)」という授業で学生たちは『進学する人のための日本語初級』(国際学友会日本語学校)を終えている(注3)。以下では2006年度行った「日本語口語訓練」における実践報告を行い、授業終了後行ったアンケートの結果を基に授業に対する学生の評価、会話能力や日本語を話そうという意欲の上昇にどれだけこの授業が貢献できたのか、そして改善点を考えてみたい。

2006年度の「日本語口語訓練」は毎週木曜日の午前8時10分から10時まで1か月程度の冬休みを挟み、2006年9月14日から2007年6月21日まで行われた。授業は10分の休み時間を挟み50分授業が2回続く形で行われる。文藻外語學院では一学期、二学期の二期制を採っており、一学期は18週である。8週授業を行った後中間テスト、その後また8週授業を行った後期末テストを行い、評価をする。成績評価は平常点が40%、中間テストと期末テストの成績がそれぞれ30%として点数化する。台湾では日本のような4段階評価ではなく、点数がそのまま成績となる。

2006年度のこのクラスの授業形態は変則的で50人のクラスを半分の25人に分け、それを2人の教師で担当し、互いに教科書、進度を統一しながら進めた。また、各学期の中間テスト終了後、授業担当教師を交代し、50人全員が必ず2人の教師の授業を両方受けるように

した。教科書はスリーエーネットワーク発行、中居順子 近藤扶美 鈴木真理子 荒巻朋子 森井哲也 小野恵久子著『会話に挑戦! 中級前期からの日本語ロールプレイ』を使用した(注4)。

受講する学生は1, 2年次に会話授業を履修済みである。また、高校在学時から日本語学習を始めた者、すでに日本語能力試験1級, 2級に合格した者などがいて日本語学習歴, 日本語能力に差がある。しかし, 1, 2年次に受けた授業はいずれも台湾人教師によるもので日本人教師による会話授業を受けるのは初めてである。学校側からは学生たちはまだ日本語で話すことには慣れていないので日本人との会話に慣れさせるようにしてほしいとの要請を受けていた。そこで, 2年目となる2006年度の授業ではロールプレイ中心の上記の教科書を用いて会話練習を中心に授業を行うことにした。

この教科書は22課から成り, 日常生活でのさまざまな場面での会話を学ぶことができる。1週ごとに1課を終えるようにし, 各週の授業は以下のように進めた。各課の目的, 背景となる基礎的な知識, それぞれのロールの説明を終えた後, 会話を作らせペアで発表させる。発表をさせた後付属のCDを聞き, 会話の流れを確認する。その後, 会話に使う表現・語彙を説明し, 来週行う次の課の説明をする, という流れで進めた。できるだけ多くの学生に発表させることを意図し, 授業の平常点は発表回数に応じて与えることにした。発表しなければ平常点は0となる。結果として筆者の行った授業ではすべての学生が毎週1回以上発表した。授業のねらいは知識を注入するよりも日本語で会話することに慣れる, 会話する意欲の向上ということに力点があった。

次に授業終了後行ったアンケートの結果を基に学生がこの授業を受けてどのように感じたのか, 会話能力や日本語を話そうという意欲の向上にどれだけこの授業が貢献できたのか, ということを考えてみたい。アンケートでは日本人教師が会話授業を担当することに関連して, 以下の七つの質問を行った。

- 1 会話授業を担当するのは日本人教師のほうがいいと思うか。
- 2 日本人教師が授業を担当することによって, 前よりも会話能力が向上したと思うか。
- 3 日本人教師が授業を担当することによって, 授業中日本語を話さなければならないという義務的な気持は強くなったか。
- 4 日本人教師が授業を担当することによって, 日

本語で会話したいという意欲は高くなったか。

- 5 日本人教師が授業を担当することによって, 日本, 日本人に対する興味が前よりも増えたか。
- 6 2006年度の筆者の会話授業ではとにかく皆さんに日本語で話してもらうことを第一に考えた。そのことをどのように評価するか。
- 7 会話授業では何が大事だと思うか。

1から5までの質問には1非常にそう思う・2そう思う・3あまりそう思わない・4全くそう思わない・5分らない, の五つから回答してもらった。また6の質問には1たいへんよい・2よい・3あまりよくない・4非常によくない・5分らない, の五つから回答してもらった。また, 7の質問には1会話練習をたくさんする・2語彙や文法の説明をたくさんしてもらう・3楽しい雰囲気・4厳しい雰囲気・5豊富な資料・6その他, の六つの選択肢から複数回答可で選択してもらった。アンケートは50名のうち40名から回答を得た。

アンケート結果を整理すると1の質問に関しては85%の学生が非常にそう思う, そう思うと考えていることがわかった。日本人教師が会話授業を担当することに関しては概ね肯定的であると判断できる。それではこの授業と会話能力の上昇, 授業中に日本語を話さなければいけないという義務的な気持, 日本語を話したいという意欲との関係はどうだろうか。2の質問に関しては65%の学生が肯定的な回答をしている。半分以上の学生が授業の結果会話能力が向上したと考えていることがわかった。また, 3の質問に関しては72%の学生が肯定的な回答をしている。この授業はほぼ日本語のみの直接法で授業を行ったため, 学生同士では中国語で話しているものの筆者に対しては日本語で話

#### アンケート結果

	1	2	3	4	5	肯定的	否定的
問1	13	21	5	1	0	34(85%)	6(15%)
問2	4	22	11	1	2	26(65%)	12(33%)
問3	6	23	11	0	0	29(73%)	11(28%)
問4	3	21	13	2	1	24(60%)	15(40%)
問5	4	16	17	3	0	20(50%)	20(50%)
問6	4	22	10	3	1	26(65%)	13(33%)

	1	2	3	4	5	6
問7	34	9	33	0	20	3
百分率	85%	23%	83%	0%	50%	8%

さなければならぬという気持を持つ学生が多かったようである。日本語を話す機会の少ない台湾で日本語を話さなければいけないという場を作り出すことには一定の成功を収めたようである。4の質問に関しては60%の学生が日本語で会話したいという意欲が高まったと回答した。

また関連して5の質問では日本、日本人に対する興味が増したかどうかを聞いたが、これは非常にそう思う、そう思うと回答した学生が50%に留まった。この要因としてはロールプレイをさせるということに授業の力点があったため、説明が最小限になってしまったこと、また、授業に取り組む際の学生たちの意識は主として会話能力の向上という語学学習上の目標に重点があったということなどが考えられる。6の質問では授業のねらいに対する評価を聞いた。65%の学生がたいへんよい、よい、と肯定的に評価している。

7の質問では会話授業において大切であると考えることについて聞いた。「会話練習をたくさんする」「楽しい雰囲気」を会話授業で大切だと思うと答えた学生が多く、それぞれ80%以上にのぼる。これに対し、いわゆる知識の注入に相当する「語彙や文法の説明をたくさんしてもらおう」「豊富な資料」を答えた学生はそれぞれ20%余り、50%に留まった。この結果から見ると、多くの学生の望む授業は「楽しい雰囲気では会話練習をたくさんする」というものであると考えられる。

以上のアンケート結果によって日本人教師が会話授業を担当することを85%の学生が評価していること、多くの学生の望む授業は「楽しい雰囲気では会話練習をたくさんする」というものであることが明らかになった。しかし、この授業では会話能力の向上を実感した学生が65%に留まること、日本語で会話したいという意欲が高くなったと感じる学生が60%に留まること、「とにかく学生に日本語で話してもらおうことを第一に考えた」という授業のねらいを評価する学生が65%であったことも明らかになった。

2006年度の会話授業では発表を強いた面がある。日本語能力に自信がある学生には抵抗はさほどなかったものの日本語能力にまだ自信がない学生、みんなの前での発表に躊躇する学生には心理的負担を与えてしまったことが予想される。また、発表することに力点を置いた結果、説明が必要最小限度に留まり、新しい語彙や表現、会話をより良く組み立てるための技術が学べなかったことへの不満も生まれた可能性もある。

この授業を受講した学生の日本語学習歴や日本語能力には差があり、授業内容に関して学生1人1人が求

めるものは異なる。しかし、授業に対する意欲的な取り組みを引き出し、日本語力が向上したことを実感してもらうためには学生たちのニーズや不満を汲み取るよりいっそうの工夫が必要である。今後もコミュニケーションを密にし、能力や性格の把握を進め、より細やかな対応を取ることを心がけたい。

#### (5)まとめ

海外で日本語を学ぶ学生にとって、日常生活での日本人との接触、日本語を話す機会はそれほど多くはない。その意味で留学は日本語能力を発揮し、自分の日本語能力を再認識する重要な機会となる。今回報告した、文藻外語學院が実施した3週間あまりの短期留学では、参加した学生たちの多くが日本語能力の向上を実感し、日本人との交流を深めることによってたくさんの貴重な体験をしたことが窺えるものであった。このような経験は日本語運用能力を向上させると共に学習意欲の向上、学習目的の明確化、異文化理解の促進などを促すものであると考える。今後更なる国際交流活動の拡大や参加する学生の増加が望まれる。

また、実践報告では会話授業終了後に受講した学生を対象にアンケート調査を実施し、授業の評価やどれだけの方が会話能力の向上を実感したか、会話する意欲が増したか、会話授業では何が大事だと考えているか、ということを探った。その結果、日本人教師による会話授業は85%の学生に望まれていたこと、多くの学生の望む授業は「楽しい雰囲気では会話練習をたくさんする」というものであることが明らかになった。現時点では授業において日本語で会話しようとする意欲の向上、会話能力の向上を実感できた学生の割合は65%に留まっており、必ずしも高いとは言えない。意欲の向上、会話能力の向上を引き出すためにどのような工夫が必要なのか、学生のニーズや性格をよく見きわめ、授業内容の改善に役立てたい。

### 3 南臺科技大學国際交流プログラムの実践例 —応用日語系サマーキャンプ（応用日語系暑期夏令營）の位置づけと意義—

#### (1)応用日語系暑期夏令營

台湾南臺科技大學では、国際交流プログラムの一つとして、応用日語系暑期夏令營（応用日語系サマーキャンプ—以下、サマーキャンプ—）を行っている。これは、台湾と日本の高等教育機関の国際交流の一環として夏休みに日本人の大学生を招いて、南臺科技大學の学生に対して授業を行ってもらうという活動である。

今回、この活動を行うに際し、台湾社会における背景とその実践がどのような国際交流としての役割を果たしたか、考えてみたい。また、運営するにあたって実際に起こった異文化コミュニケーション摩擦を具体的に挙げて示し、どのように解決したか、その手段を示したい。

## (2)台湾における科技大學

台湾における科技大學は、一般大学と異なり、高級職業学校（高職）を卒業し、高度な専門的知識を持つ職業人を育成するために設けられた教育機関である。例えば國立臺灣科技大學では、日本の大学でいう工学部（工程學院）、電子工学部（電子學院）、経済学部（管理學院）、人文社会学部（人文社会学學院）などが学部（台湾では學院）として設けられている。そこでの日本語教育は人文社会学學院の應用日本語系（もしくは應用外語系）として位置づけられる。一般大学の日本語教育と内容はほぼ変わらないが、科技大學ではビジネス会話や観光日本語などにも力を入れており、学生は日系会社への就職や通訳、翻訳者としての専門の道を希望することが多く見受けられる。

## (3)南臺科技大學について

南臺科技大學は台湾の古都である台南市に隣接する永康市にある。周辺は工業区で南台湾の重要な産業拠点になっている。南臺科技大學は1969年に「工商専校」として創立され、1996年に「技術學院」、1999年に現在の「科技大學」となった。特色としては「全人教育」、「一流學府」および「企業精神」という理念と精神のもと、「發展國際化」、「師資優良化」、「設備精質化」、「學習多元化」を目指し、国際發展のための優れた科学技術の開発と全人格的人間の教育を目指すことを目標としている。

学部は五つあり、工學院、商學院、管理學院、人文社会学學院、數位設計學院（デジタル系）である。学生数は約6000人である。應用日本語系は人文社会学學院に属し、サマーキャンプはここで行われる。現在、交流協定を結んでいる大学は46校である。その中で交流している日本の大学は20校あり、南臺科技大學が日本の大学との交流を促進していることが窺える。

## (4)サマーキャンプにおけるこれまでの流れ

南臺科技大學におけるサマーキャンプは、2004年に「外語實務實習」というカリキュラムの1単位分の実習として、学生が課外で日本語を使用する場面を探し、

参加するという目的で設けられたものである。

2004年、日本から本大学の学生と同じ年代の者を呼び、何らかの国際交流ができないかという提案により、当初は台湾國立成功大學に来ていた留学生を私的な依頼によって日本語・日本文化を教えてもらうということを行った。また同2004年、明海大学に働きかけ、学生を講師として招き、日本語を教授してもらうこととなった。この試みは成功したかにみえたが、南臺科技大學の日本語系学生は、夏休み冬休みに行われる「外語實務實習」に対しては、普段の講義と異なり、祝祭性の強い内容を期待しており、普段の授業と同じ日本語教授よりも日本文化に触れる機会をとらえていたのである。

そこで今度は2006年に国学院大学の院生・学生に祝祭性の強い内容（つまり日本事情を中心とした授業）で行ってもらった。サマーキャンプは2週間強の期間に66コマ（1コマ40～50分）を行うので、これには準備する側に相当の負担を強いる結果になった。ただ、南臺側の学生は大変満足しており、「このような機会があればまた参加したい」「先生と一緒にまた台南で遊びたい」（注5）と作文で書いており、かなり好評であった。しかし、問題点としては、日本語系の学生に関しては祝祭性の強い内容で成功したのだが、非日本語系（経済や経営、工学部など）の学生にとっては、まず文字の導入さえもおぼつかないレベルであったので、コミュニケーションがうまくゆかず、「国際交流」「日本語教育」という観点からすると疑問が残る結果となった。また、クラス編成が行われず、未習、初級、中級前半、中級後半など、さまざまなレベルが混同していたため、講義をおこなうときに高学年の者が通訳代りに働くという場面もあったそうである。

以上のような経過をたどり、現在のサマーキャンプが行われた。これら授業面での問題点だけでなく、運営面での異文化コミュニケーション摩擦も起こっているのでそのことにも触れたい。

## (5)2007年度 暑期夏令營（サマーキャンプ）報告について

2007年のサマーキャンプは、国学院大学と日本女子大学の学生を講師として招き、日本語・日本文化の授業を行ってもらった。ここでは日本女子大学のサマーキャンプ形態と日本人に接したチューターの感想について報告する。

期間は8月20日から8月31日の2週間（訪台は19日、帰国は9月1日）で、非日本語系クラスの66コマを担当

してもらった。日本女子大学側は引率の教員1人（文学部日文学科）、学部学生7人の合計8人である。これに参加し、講義した講師（学生）は66コマ分のアルバイト代が支給される。

また、サマーキャンプに参加登録した非日語系の学生の所属の内訳はそれぞれ、商學院の国際企業系（International Business）と管理學院の企業管理系（Business Administration）の2年生11人および、管理學院の行鎖與流通系（Department of Marketing and Logistics Management）と、同じく休閒事業管理系（Department of Leisure, Recreation, and Tourism Management）の3年生49人、4年生2人の合計62人である。これを2クラスに分け、1クラス31人とした。非日語系クラスは、学生自身の専門のほかに日本語を第2外国語として受講している学生が多く、将来日本語を使いながら国際貿易などの仕事に携わりたいという意欲があり、日本語習得に対するモチベーションも高い。ただ、実際の日本語能力としては初級、もしくは未学習というレベルであり、カタカナを読めない学生がほとんどである。そこで、日本女子大学側には、サマーキャンプが祝祭性の強いものであり、参加登録している学生の学習時間は少数であることを説明したうえで、基本的に授業形態は任せるという形をとった。日本女子大学が提示した日程案には文字、会話、文型の導入のほかに文字を使った活動が取り入れられており、従来のサマーキャンプに近い形ながらも、講義を受けることが中心という態勢となった。

そして、非日語系クラスということで日本人をサポートするチューター（学部4年生）を用意した。主な仕事は通訳である。

最初の授業はサマーキャンプのオリエンテーションである。内容としては、例えば、このサマーキャンプで講師を務める日本女子大学の学生が日本女子大学を紹介したり、非日語系で行う授業での、日本女子大学としての方針を説明したりする。その際、チューターが通訳となり、各講師の自己紹介や授業方針の説明を行った。そして午後からは実際の授業を始めた。非日語系はA班とB班に分かれており、それぞれ日本女子大学は担当を決め、授業を2週間行った。

実際の授業ではチューターが通訳となりながら、前述の授業を行った。結果は、受けた学生の約90%以上が「自身の日本語能力が伸びた」また「とても楽しかった」、「もっと授業を受けたかった」と大好評で終了した。

その際、実際に日本人に接した台湾人スタッフの意見を記しておく。日本女子大学のチューターを担当し

たのは、4年生の男性1名と、サポートとして加わった4年生の女性1名である。サマーキャンプについてスタッフにアンケート調査をし、詳細なところは面接を行った（注6）。

サマーキャンプのスタッフとして参加してみようと思った理由としてあげられるのは、「日本人と関わるアルバイトをしたかったから」が共通して見られ、そのうちひとり「ほかの人に勧められた」というのが参加したきっかけであった。つまりはじめは具体的に強い動機がなく、参加を希望しているのである。また、参加する前後で日本人に対するイメージが変化したかどうか聞いた。台湾の日本語学習者に多いのだが、例に違わず、ふたりともサマーキャンプの前に日本人に対して好意的な印象を持っていた。「礼儀正しい、やさしい、かわいい」という漠然とした印象だったものが、サマーキャンプで現実に日本人の学生と接し、この漠然とした思いが実感に変わったと述べ、いずれも良い印象を残しているようだ。また、チューターや手伝いをしてどんな点が良かったかという問いには「日本語が上手になった。友だちができた。いい思い出がいっぱい」と答え、悪かった点に関しては「時間が短い」という回答が得られた。つまり台湾人のスタッフは今回のサマーキャンプで高い満足度を示したのである。

また、コミュニケーション面での質問に、日本人の言動で困ったり不思議に思ったりしたことがあるか聞いてみたところ「なかった」という回答であった。では、台湾人の学生の言動で困ったこと不思議に思ったことがあるかどうか聞いてみたところ、そういうことも「なかった」そうである。つまり台湾人は日本人に対しても台湾人に対してもコミュニケーション面で困難に思うことはなかったということになる。

しかしながら、日本人には異文化コミュニケーション摩擦を感じるがあったし、また、あったようでもある。以下そのことについてどのようなことが起こり、どのように解決したか具体的に述べたい。

#### (6)異文化コミュニケーション — 事例と解決策 —

台湾でサマーキャンプを進めるにあたって、いくつか起こった異文化コミュニケーションの実例を三つあげ、その後それに対する解決策を以下に示す。

##### ケース① 宿舎

1か月前から予約していた宿舎が大学側から突然キャンセルされた。その理由を聞いたところ、「布団がないから」という理由である。「布団は用意する」と

伝え、再び予約しなおした。

#### ケース② バス

日本への帰国のため、バスをチャーターした。空港に2・3時間ぐらい前には到着していたいという希望があったので、バスを朝10時に大学の宿舎に来るように予約した。ところが、出発前日の夜になって突然バスの運転手から電話がかかってきて、11時半に来るといふ。10時で予約しているはずだと言っても11時半にするという。そこで、男性の台湾人に交渉してもらったところ、10時に来ることに同意した。

#### ケース③ 控え室

日本女子大学の控え室を確保した。先に調べ、何もなかったことを確認してから部屋を押さえていたはずが、突然会議をするので空けてほしいといわれ、控え室を移動しなければならなくなった。9時から授業が始まるのに10時に会議が始まると直前に言われ、大変困った。

これらのほかにも、さまざまなことが突然変更されることが多かった。また、先に説明しておいてくれれば対処できたものもあった。これらは異文化コミュニケーションの事例として適例ではないかと思ひ、記した。これらに対する解決策は、嚴重に抗議することも必要ではあるが、その前に、そのまま受け入れることも重要なことであると思われる。①の例では、再びこのようなことがないように、こういう状況で日本人がどう思うかよく説明し、注意を喚起する必要があるであろう。また、②のケースでは、よく状況を説明して話し合うことが必要である。②については「初めて台湾に来た日本人がいる。」「日本人は空港には余裕を持って行きたがる。」などとよく状況を説明することによって理解を得られ、解決できた。そして、③のような事例では、腹を立てずにそのまま受け入れ、ある程度、仕方がないことだと思ふことが必要となる。特に③の場合、背景として大学の上部の人たちが会議で部屋を使用するというので、応用日本語系では如何ともしがたく、日本女子大学側には、申し訳ないが移動してもらふことになった。

しかしながら、このようなことに慣れない日本人には理解し難い状況である。事実、今回参加したメンバーにも変更が多く起こることについて不満を持った者がいた。日本では先に物事を決めてその通り行動するが、台湾南部では物事は常に变化するものであり、状況に応じて変更することが当たり前である。台湾人は「日本人は融通が利かない」というが、日本人は「台湾人は言う通りにできない」という。これは文化的な

相違であるから、仕方がないことであり、そのような相違があるということをお互いに認識して理解しあうことが重要である。そういう意味でも国際交流に対して希望を持っている者は異文化であることを念頭において行動することが必要となろう。

このような例ばかりあげると誤解される可能性もあるが、決して台湾人は日本人に対して冷たいわけではない。むしろやさしく親切であろうとする心のほうが強いと思われる。お互いを理解しようとする強い意志を持ち、異文化であることを念頭において丁寧に行動し、対処すれば摩擦は起こりにくいと思われる。

#### (7) まとめ

2007年度、日本女子大学の学生を招いたサマーキャンプは、学生同士の交流、国際交流として概ね成功であったということができよう。それは、台日の学生同士が今現在でもインターネットを通じて交流を続けていることから窺える。またスタッフも「とても楽しかった」「友達がたくさんできた」など両校でサマーキャンプにかかわった者から肯定的・積極的な意見を得ることができたからである。

しかしながら、ハード面に対する不信感・不安感は拭い去ることができない。台湾でも有数の他大学の国際交流担当者も「怖くてあまり深いところまですすめられない」と言っていたのを思い出す。彼女は英語が堪能で留学経験もある実績豊富な人物である。南台湾の高等教育機関の態度は、日本の文化的な背景からすれば、突飛なこと、あり得ないこととして認識されることが多く見受けられるようであるが、これで台湾との国際交流が進まなくなるのは、はなはだ遺憾なことである。今回のサマーキャンプで見られたように台湾と日本の青年は、これほど友好の輪を広げているのに対し、その対応には問題が残る。しかしこれも日本文化で育った者から述べた意見である。台湾人の側からいえば、それはあり得ることと認識されるだろう。日本人にとって大学の宿舎をキャンセルされるということは、国際交流を拒否されているような印象を受けるかもしれないが、台湾人にとってそれは大きな問題ではない。また予約しなおせばいいし、ホテルに泊まればいいのである。そういった意味で、異文化コミュニケーションで摩擦を感じる回数は日本人のほうが多いようである。だからこそ、日本人はより寛容な意思を持って台湾人のおおらかさに学ぶべきところを見つけてみるよう努力することが必要なかもしれない。

2007年度のサマーキャンプを通じて得られたこと

は、異文化コミュニケーション摩擦はあるものの、台日間の青年の国際交流を通じてお互いの理解を深め、台湾と日本の友好を深めてゆく意義のあるものだけということである。特に台湾南部との交流は北部に比べ遅れがちであった。2007年、台湾新幹線の開通に伴い、これからは台湾全土における国際交流がますます盛んになると予想される。台日青年の友好の輪を広めるべく努力していきたい。

#### 4 結語

本稿は、台湾の大学における国際交流プログラムの現状や異文化である故に生じた問題の事例を取り上げた。具体的には台湾南部の文藻外語學院における日本語教育と南臺科技大學のサマーキャンプについてアンケートや面接調査の結果をもとに論じた。

まず、文藻外語學院が実施した3週間あまりの短期留学では、参加した学生たちの多くが日本語能力の向上を実感し、日本人との交流を深めることによってたくさんの貴重な体験をしたことが窺えるものであった。このような経験は日本語運用能力を向上させると共に学習意欲の向上、学習目的の明確化、異文化理解の促進などを促す意味で意義の大きい活動であり、今後継続し拡大させていくべきものであると考える。

次に、南臺科技大學で実施された2007年度のサマーキャンプの報告からは、日本語教育を日本人学生が行い、台湾人学生と交流をするという試みを行った結果、日台双方に積極的な交流が生まれたことが窺えた。主に日本人の側からカルチャーショックに関連した記述が多く見られ、日本人学生の異文化体験として見た場合、何も気づきがないよりも有意義な体験ができたと考えられる。また、これからの異文化理解の促進のため積極的に問題点とその解決方法を考える必要性を感じるものとなった。

以上のような実践は、実践研究として公開されることが希であるため、研究者の間でも情報を共有することが難しかった。山形大学でも異文化交流コースにおいて「アジア文化研修セミナー」という授業が2007年度後期から始まり、初回は、台湾北部の大学間協定校である銘傳大學に「亞洲文化研習團」として赴く準備を整えた。実施に際しては、本稿によって得られた知見を最大限活用する所存である。

#### 【注】

- 1) 「96年度大專院校概況 (excel file) 95學年度台湾教育部發布」による。

- 2) 分析手法は奥村圭子 (2006) および園田博文・奥村圭子・内海由美子・黒沢晶子 (2006) による記述分析を応用している。

- 3) 台湾では大新書局という出版社が版權を獲得し、『進學日本語初級Ⅰ』『進學日本語初級Ⅱ』というタイトルで販売している。授業ではこれを使用。

- 4) 台湾では大新書局という出版社が版權を獲得し、『會話挑戦! 日本語會話角色扮演 中級前期』大新書局というタイトルで販売している。授業ではこれを使用。

- 5) 95學年度南臺科技大學人文社会學院應用日文学系日文習作 (一) 2年生Dクラスで2006年9月に「夏休みの思い出」の題目で行った作文から抜粋した。

- 6) 2007年9月8日から10日の期間に行った。方法はアンケート調査と面接調査である。

#### 【参考文献】

- 1) 奥村圭子 (2006) 「異文化間コミュニケーション教育における内省の活性化」『山梨大学留学生センター研究紀要』第1号: 17-30.
- 2) 園田博文・奥村圭子・内海由美子・黒沢晶子 (2006) 「留学生と日本人学生の交流活動実践から見えてくるもの—「気づき」を通じた異文化間コミュニケーション能力の養成に向けて」『山形大学紀要 (教育科学)』第14巻 第1号: 11-33.

#### 【謝辞】

韓国仁濟大学校人文社会科学大学日語日文学科の全成燁先生と国実久美子先生には、本稿を仕上げる段階でさまざまな助言を戴いた。記して謝意を表す次第である。